

# みなとMOIOMACHIケンチュクさんぽ vol.10

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部  
兵庫地域会 地域まちづくり委員会

## 間にある都市

みなと元町境界について、何かかいてみるというお題をいただき、最初に頭に浮かんできたことは、あの境界を歩いていると、不思議と神戸の街のイメージがなんとなく頭に広がるような気がするという根拠のない経験的実感であった。取り立てて特徴的な建築物や通りを構成する要素があるわけでもなく、比較的雑多に見える通りであるにもかかわらず、神戸という都市の持つ何か骨格のようなものが感じられる気がするのである。そこで、今回このようなお題をいただいたことをきっかけに、この認識のメカニズムに対する仮説を立てることをひとまずの目標と定めることにした。

神戸の街の骨格のようなものが感じられるという以上、まずは神戸の街を俯瞰してみる必要がある。特にみなと元町境界を含む、神戸の現在の都心として機能する街を俯瞰して見ることから始める。かつて生田川の堤広場である東遊園地を包含するフラワーロードが都心の南北軸を形成しており、その西側には固有の歴史を内包した旧居留地が存在し、壁面線がストリートを構成する街区の成り立ちは健在である。旧居留地から鯉川筋を境に西に広がる南京町は独特な様式的装飾と熱気があふれるチャイナタウンである。南に目を向けてみれば京橋以南には過去には世界的なコンテナ港として君

臨し、その遺構をとどめた港が広がっている。このように記述してみると、改めてなんと多様な個性的な街の粒が同居していることであろう。それぞれに歴史的背景に裏打ちされた個性的な街の粒がモザイク状にひしめきあっているのである。まさにこのことが神戸の都心を形成する街の特徴の一つであるといえるのではないだろうか。

改めて、みなと元町という場所を、このようなモザイクの中で眺めてみると非常に特徴的な立地特性を持っていることが見えてくる。つまりこの境界は、東に旧居留地、北に南京町、南に港と様々な特徴的な街の粒である、多様なモザイクの接点に位置していることがわかる。改めてそのような視点でみなと元町を歩いてみると、様々な街の粒が顔出しする特徴的な通りの面白さを味わうことができる。通りの先にまるで異世界へ誘うかのような南京町の門が口を開けていたり、旧居留地の建築群が上空を覆っていたりもする、いくなればモザイク都市の粒たちが顔みせするハブのような役割をはたしていると言えそうだ。このような街のハブであることは、ミクロな路上観察的視点から、通りを構成する個々の要素からもうかがうことができる。旧居留地の様式性に引っ張られたような部分的な石のファサードやアーチ窓があるかと思え

ば、いかにも中華を思わせる赤い提灯の装飾などがそれにあたる。

さらに、改めて通りを歩く中で、交差点にたってあたりを見回してみると、南側に目を向ければ、港の気配をはっきりと感ずることができ、北側には六甲山の緑を望むことができる、この通りは神戸の地勢を見通すことのできるビスタとなっていることに気が付いた。つまり、このみなと元町を歩く経験は、私たちに海と山をつなぐ地勢の中に、個性的な街の粒が面的に広がりモザイク状にひしめき合っているという、現在の神戸の都心を形成する骨格と呼べそうな様相を浮かび上がらせていると言えるのではないだろうか。このようなメカニズムによって、私が最初に想起した都市のイメージが浮かぶ場所になっていると言えるのではないだろうかという仮説を立てるに至った。

トマス・ジーバーツは田園地域の海にまるで群島の様に浮かぶ多数の都市というイメージを「間にある都市」という概念として書き出したわけであるが、まさに神戸という都市にこのイメージを相似形に当てはめてみると、みなと元町という場所に、ひしめく街の粒の間に浮かび上がる、間にある都市としての固有の粒がまた一つ浮かび上がって見えてくるのである。



北には六甲山を望み、中華街が口をあけている



東に旧居留地を望むことができる



南に港を感じることができる



畑 友洋 (はたとむひろ)  
株式会社畑友洋建築設計事務所主宰  
／神戸芸術工科大学准教授  
／京都大学非常勤講師